

# 月光の影

（第二回）

高岡啓次郎

五章

生物学者であり、今は流行作家となつた結城慎一郎の一連の大成功に対して不審を抱く人もいた。それはN新聞文芸部の辣腕で知られた斉田四郎だつた。三十になつたばかりだが、遠慮なくものをいう人物で他人からは好き嫌いが別れるタイプだつた。大きな体と仕事場に響き渡るほどの声の持ち主で水気のない長い髪を狭い額にたらしめている。

斉田は以前から結城の本をひととおり読んでいたが、ここ数年に見られる唐突ともいえる変化に驚きを感じていた。いくら月夜の森で神秘的な体験をしたといつても、これほどまでに文体が急激に変化するものだろうか。

そんな疑問を人知れず感じていた。ファンのひとつとして結城の成功が嬉しくないわけではないが、職業意識からくる、どこか釈然としないものを感じていた。今までなんども結城の講演会に出席し自社の新聞に取り上げたことがある。斉田は以前の結城の著書と最近のものを詳しく比較検討し

た。調べれば調べるほど疑問は深まる一方だつたが決定的な証拠は見つからなかつた。だが、辛抱強い調査と綿密な研究を密かに重ねた結果、彼は一つの結論に達しつつあつた。明らかにここ数年の結城慎一郎の陰にはゴーストライターがいるに違いないというものだつた。

それが誰なのかという点についてはまだ考え付く人物がいなかつた。しかし斉田は糸口をつかみつたあつた。結城の文体が変わり始めたころに北海道を訪ねており、突然予定を変えて、長沼に何回か足を運んでいたのをつきとめた。

何かあると思つた斉田は長沼へ行つてみなければならぬと思ひ立ち、夕張郡長沼町に關してネットを検索した。そこは北海道でも初めて本格的な米作りが始められた所で、広大な石狩平野に開けた美しい農村地帯であることを知つた。札幌や千歳からも近く、結城慎一郎がむかし札幌R大学の教授をしていたことからすると、その関係者がいてもおかしくはない地理的な位置にあつた。

斉田は自らの鋭い勘に導かれるままに当時の卒業生名簿を丹念に調べた。その中から十三年前にR大学を卒業した高梨春樹の名前が見つかつたのである。その後の調査でその青年が癌で亡くなつてもう三年を過ぎたことがわかつた。残つた七十過ぎの母親もあとを追うように彼の死の半年後に世を去つていくというのだ。

二人とも亡くなつていくから手がかりの糸をたどるのは容易ではない。だが、三年前という時期は結城慎一郎の文体が著しく変わったころとほぼ一致しているという点に斉田の嗅

竟は鋭く働いていた。もし結城のゴーストライターが無名の酪農青年であったとすれば、それはもはや内密にはできない重大な問題だと彼は思った。だが何の根拠もない。まして死んだ人間が結城に代わって書くことは不可能なはずだ。

一週間後、斉田は夏の休暇を利用して北海道へ飛んでいた。現地で車を借り、同窓生名簿にある住所をもとに幾つもの川や丘を越え、高梨春樹が住んでいたという牧場をめざした。北国とは思えない鋭い日差しが収穫期をむかえた小麦畑を照らしている。メモを頼りに何人かに道をたずね、黒い牛が放牧されている農場を見つけた。

近所の人の話によれば、今は母方の甥が酪農を引き継いでいるという。斉田は砂利道に車をとめて歩きた。体じゅうから一気に汗が滲んでくる。北国なのに東京と変わらない暑さに驚いた。納屋の近くで干し草のかたまりを車から降ろしていた四十がらみの男に斉田は近づいた。汗が額にながれ、肩にたまったものが目にしみてくる。汗を袖でふいてから力パンを開けた。かつて柔道で鍛えた分厚い肩からペンだこのできた手を伸ばして名刺を差し出した。

「東京N新聞の斉田と申します。今日は取材で伺いました」

男はいぶかしげな表情で名刺に目をやった。

「何の取材だい？」

「北海道ゆかりの作家である結城慎一郎さんの特集記事のため、少しお聞きしたいと思ひまして」

「あの有名な先生かい、どうしてこんな所に来たの？」

「こちらには教え子の高梨春樹さんがおられましたよね？」

「ああ、春樹はもう亡くなったよ」

「ええ聞いています。癌だったそうですね。お若いのに残念なことです。牧場を親族の方が引き継がれたとか」

「なんだ、知ってるのかい。おたくは本当に新聞の人？」

「もちろんです。結城慎一郎氏が高梨さんを可愛がっておられたと聞いたものですから」

斉田は少々あてずっぽうにいつてみた。男は呼び水に誘われるように答えはじめた。

「あんなに香典をよこして、みんなたまげてたよ」

「差し支えなければ教えてもらえませんか」

「今だから教えてもかまわんだろう。五十万だよ。東京の方はどうだかしらんけど、北海道じゃ金持ちの親戚でもそんなにする人はめつたにいないね」

「東京でもあまりないと思います」

ここで斉田はさらに話を誘導した。

「ところで高梨さんは生前、結城慎一郎氏に触発されて何かを書いていたらしいですがご存知ありませんか？」

「そうらしいな。亡くなった伯母さんがそういつてたよ」

男は面白いように乗ってきた。真相がつきとめられるのは早いかもしれないという期待をいだかせた。斉田は大きな手ごたえを感じながら少しうわすつた声でさらに聞いた。

「伯母さんというが高梨さんのお母さんですよ。どんなことを話されていたのですか？」

「春樹がいつも何かを夢中で書いていたといつてた。牛の世話の合間に時間を作っていたらしいよ」

「どんなものですか、小説とかでしょうか？」

「さあ、俺は分からんな。伯母さんも目がかなり見えなくなつていたから読んだことはないらしいよ」

「書いたものは何かありませんか？ 資料にしたいのです」

「ないね、処分したんじゃないかな」

「どこかに少しでもありませんかねえ。手紙でもいいし、農業に関して地元の会報に載せたものでもかまいません」

「そんなものが資料になるのかい」

「なりませんとも。結城慎一郎氏の特集を出すにあつて教えずにうちに与えた影響をぜひ含めたいものですから」

「残念ながらないよ。伯母さんが死んだあと、この家の遺品は親せきで片づけたけどそれらしいものはなかった」

「きつとどこかにあるはずなんです、どなたか思い当たる人はいませんか」

「まさか、別れた嫁にやつたわけでもないべしな」

「別れた奥さんですか。その方は今どちらに？」

「それがなんと」

「どうかされたんですか」

「今年の冬に事故で逝つてしまつたんですわ」

「そういうことです。旭川の国道でスリップしたトラックがセンターラインを越えてきてぶつかつたと聞いたな。実家の

親も一緒だつたらしいよ、若いのに気の毒なことだよ。春樹も嫁も何の因果なのか」

そういつて男は遠くを見た。白くたなびく雲の下に放牧

された牛たちが平和そうに草をはんでいる。男は視線を近くに戻して話した。

「女の子がひとりいるんだよ。一緒に乗つていたらしいが、不思議なことに外傷は少なくて助かつたらしい。だが頭を強く打つていて、事故のあと目が見えなくなつたと聞いた。不遇なことつて続くもんだな」

「お気の毒ですね。それで、その子は今どこに？」

「どこかの施設に入つたつて聞いた」

「ご存知ありませんか？」

「分からんなあ、確かミナちゃんという名前だつた。ほんとに不運な子だ。あんな幼いうちにわずか数年で両親を失い、目も見えなくなるなんて。春樹と別れていなければ親戚の誰かが育てたろうが、今ごろどうしているもんだか」

齊田は高梨春樹とその家族に起きた不運を聞いて胸が痛んだ。記者生活を長く続けているうちに、いくぶん枯渇していた同情心がよみがえるようだった。男が時計を気にしはじめたので、何か分かつたら知らせしてほしいといつてそこを出た。このあと別れた妻が住んでいたという旭川にも行きたかつたが休暇に余裕はなかつた。また、訪ねたところで当事者はこの世にいないのだ。高梨春樹が何かを書いていたのは間違いないようだが、詳細を明らかにしないまま東京へ帰らざるをえなかつた。

このとき、真相はつきとめられないままに終わつたが、なんと十一年も後になつて劇的な進展が見られた。おりしも静岡県浜松市では結城慎一郎の記念館完成を祝う祝賀パーティ

が開かれていた。多くの来賓が祝福に駆けつけたが、その中には村上嘉門をはじめとする文壇関係者、ジャーナリスト、地元の有力者や工事会社らが多数集まっていた。

その中で、結城自身が注目を浴びたのは当然だが、もうひとりだけ、出席者の視線を著しく集めた人物がいた。それは黒髪のすらりとした女性で、遠くから見てもその美貌は人目をひいた。ずっとびったりと寄り添うようにそばにいて、身のまわりの世話をしているのを見て、人々がさまざまに憶測を働かせたり、噂をしたりしていた。

「ねえ、あの女の人はどなた？」

「どの人のこと？」

「結城先生の傍にずっといる美人よ。恋人かしらね？」

「ばかねえ、あの方は娘さんよ。確か十年以上も前に養女になさった人よ」

「まあそうだったの。そういえば先生は、別れた奥様との間にお子さんがいなかったわね」

「知人の娘さんをひきとつたみたいよ」

「そうなの、それにしてもきれいな娘さんね、お歳はまだ二十歳くらいかしら」

「まだ十八歳ですって。美奈子さんとおっしゃるのよ。アメリカで学校に行きながら絵の勉強をされているそうよ。すごい才能らしいわ。結城先生もほとんど向こうにいらつしやるみたい」

そばでこの会話を聞いていたのがN新聞の斉田だった。彼はしばらく東南アジアの支局で働いていたが、つい最近帰国

したばかりだった。十一年前の豊かだった髪の毛の一部を残すまでに禿げあがっており、筋肉質だった体に贅肉がたつぷりつきはじめていた。斉田は結城美奈子を見ていて、その美しさに心を打たれたと同時に大きな疑問をもった。あの娘は誰だろう。どこから来たのか。その生い立ちに深い関心を抱いた。会場の隅に立ち、冷ややかな思いで式典を眺めながらすかかな声で美奈子の名前をと覚えてみた。

「美奈子。みなこ。ミナ子」

そのとき突然、しばらく眠っていた神経がつながったように体がビクッと動いた。まさか、嘘だろう。斉田は思い出しした。十一年前、内密に北海道の長沼を訪ねたとき、農場を引き継いだ母方の甥が、高梨春樹の娘のことをミナちゃんと呼んでいたことを。だが偶然かもしれない。急いで社に戻り、結城が娘をもらったころのことをつぶさに調べてみた。その結果はまさしく凶星だった。斉田は長年追い求めていたネタに新たな光明を見つけた。

斉田は乱雑に置かれた仕事場の机にたたずみながら思っていた。まだ大きな疑問が残っている。施設から引き取られた女の子は自動車事故で目が不自由だったはずだ。だが見ているがいい。俺は必ず真相をあばき、会社の連中と世間をアツといわせてやる。来年の今ごろ、俺は必ずあの椅子に座っている。斉田はペンを握りしめ、窓辺で西陽を受けた編集長の席をにらみつけていた。

しかし思惑通りにものごとは進まなかった。この直後に斉田は新聞社を辞めている。報道に関する上司との対立でジャ

「ナリストとしての意地を通すかたちで社を退いた。このあとフリーのライターとして生活する道は厳しかった。社会問題を扱うのが得意だったが食べていけないのだった。

結局、斉田はすぐ売れて金になるスキヤングラスなネタを追い求めるようになっていった。満足に生活費を入れられない期間が半年ほど続いたころ、十歳も若い妻が後輩の男とできてしまった。四十代にして孤独の淵に投げ落とされた斉田は人間不信と自暴自棄に陥り、酒と女で憂さを晴らすという、道を踏み外した男の常道ともいえる日々を続けた。

フリーライターとしての道を諦めて三流通雑誌に就職したころにはサラ金数社に多額の借金ができていた。暗いアパートに帰つても、待ち受けているのはカビ臭い匂いと請求書の山だった。それらを一枚一枚眺めていると、まるで理想そのものがサラ金の督促状の下に埋もれてしまう。いつか長沼で高梨の甥が、不遇なことは続くものですかねえ、といった言葉が自分にも起きていることに齒がみした。

斉田の荒んだ生き方は、ある意味で結城慎一郎には幸しいたといえなくもない。浜松で久しぶりに結城を見てから、養女にからむ新たな疑惑を覚えながらも追及する手がすぐに届くということはなかった。資金のない斉田にはアメリカはあまりにも遠かった。

## 六章

このときから十四年前、結城慎一郎は長沼で高梨春樹の葬

儀に出席したあと急いで東京に帰ったが、その後、人を頼んで高梨青年の別れた妻と子どもについてその道のプロに調べさせた。どうしても放っておけない気がしたからだだった。

それによると、高梨の妻だった人は石野志保子という名前前で、春樹と別れたあと旭川の実家の近くにアパートを借りて三歳の美奈子を育てながら生活していることが分かった。

志保子は春樹と結婚する前に勤めていた技術をいかし、近くにある歯科医で助手の仕事についていた。きれいな職場で清楚な制服を着ての作業だったが、その内容は見かけよりもはるかに厳しかった。気難しい医師に怒鳴られ、古くからの先輩のいびりを受けながら、一日中他人の口中ばかり眺めている立ちっぱなしの仕事は楽ではなかった。

だが、小さな娘のためにも負けるわけにいかなかった。夕方六時に娘を保育園に迎えに行き、アパートに着いたころには、ほっそりとした足が、疲れとむくみで靴が食い込むほど腫れて重くなっていた。どうしてこんな生活を送らねばならなくなつたのか、それを思うと後悔の気持ちにさいなまれることがある。嫌いで別れたわけではないのに、あの地に踏みとどまれなかつた自分がなさけなくなる。

短大生のとき、長沼の農業体験ツアーに参加した。そこで出会ったのが春樹だった。ひたむきに酪農に夢を託して生きている素朴な青年が、普段接している都会の若者よりはるかにたくましく新鮮に見えた。志保子はそのときの印象が忘れられず、プライベートで何度か訪れた。やがて春樹と夢を語り合い、恋愛関係になつていった。

高梨春樹は背がとびぬけて高く、知的な感じのする顔立ちだったし、志保子はスリムで涼しい瞳をした垢抜けした娘、たつたので、二人の結婚は人も羨むような美男女のカップルとして田舎の地では噂になった。しかし農村での現実には厳しかった。来る日も来る日も牛の世話をし、朝早くから夜遅くまで気を休める暇もなければ休日もない。慣れない生活に志保子はいちじるしく体調を崩した。頭では分かっていたのだが、溜まっていく心身のストレスをどうすることもできなかった。

一年後に娘が生まれてからはさらに具合がおもわしくなくなり、旭川の実家に帰る日が多くなつた。春樹は志保子を愛してはいたが、自分の傍にいてどんどん体調が悪くなつてゆく様子を見ているのが辛かつた。ある日、耐えられなくなつた志保子が深い井戸の底から上を見るような目をして離婚の話を持ち出そうとしたとき、春樹は何をいい出すのかがもう分かっていた。彼女が限界を超えているのは周りの誰が見ても明らかだった。春樹は志保子を去らせることを黙つて承知した。式を挙げてから四年目にして、二人の結婚は挫折したのだった。

志保子が子どもを連れて出て行くとき、ぼろぼろになつて泣き崩れたのは春樹よりもむしろ老母のほうだった。ただでさえ目が不自由だった老母は可愛い孫娘との別れのために涙を泣き腫らし、その後いつそう視界が暗くかすむようになってきた。このとき志保子はいいいたいことの半分も告げることができなかつた。それを伝えたくて窓辺のカウンターの上に手紙

を置いてきた。その場所はお気に入りの空間だった。しばしばそこに座り、どこまでも続く緑の草原を飽きることなく眺めていたものだった。

しかし、ここでの生活に挫折してからはこの場所を明らかに憎んでいた。日中なのにカーテンで景色を見えなくしていたことさえあつた。別れの日、晩秋の冷たい光がカウンターに注がれていた。そこに志保子はひっそりと別れの手紙を置いた。

『本当にごめんなさい、こんなことになつてしまつて。あなたの力になり、あなたをずっと応援したいと思つていたのに自分がこれほど弱い人間だとは思いませんでした。あなたがきらきらと輝く目で夢を語ってくれたのを昨日のように覚えています。一緒にがんばつてその夢をかなえるはずだったのに申し訳ないです。お母様も私には優しくして下さいました。本当に今までありがとうございました。私の至らなさでこうなつたのですからどうか送金はなさらないでください。またあなたも大変なときでしようから。私は美奈子を一生懸命に育ててゆきます。あなたもいつか、本当に助けてくれる別の良い人を見つけて下さいね。白々しく聞こえるかもしれませんが、これからもずっと心の中であなたを応援しています。どうかお体を大切にね。お母様にも大変なご迷惑をおかけしました。心からお許し願いたいと存じます。美奈子が将来あなたに会いたがつたらそのときはどうぞ会つてあげてくださいね。その日が早くきて、美奈子が立派に成長した姿をいつか見て下さい』

志保子

数日後、春樹から手紙がきた。その中には、こちらこそ謝らねばならないことがたくさんあると書いていた。自分は都会で育った娘に情熱を込めて良いことばかりを語り、農村での生活を憧れるようしむけた。その話と現実とのギャップで君は苦しんだに違いない。あれほどまでに心身を壊してしまつたのも自分の責任以外の何ものでもない気がする。

お金は送らなくていいという志保子の申し出にもかかわらず、春樹は少ない稼ぎの中から養育費を捻出しては送り続けた。だが、彼が娘に会いにくることはなかった。娘も父親を慕っている。しかし春樹はかたくなともいえる考えから会いに来ようとしなかった。

志保子は思い余つて電話を入れたことがある。しかし、そのとき電話に出た母親の言葉はこうだった。春樹はなんども遠くからあなたがたを見に行っている。でも二人の生活をかき乱したくないので近くには行かないと心に決めていたようだと。だが、そのとき母親は春樹の病気のことは教えてくれなかった。固く口止めされていたという。もし知っていたら、どんなことをしても娘を連れて会いにいったに違いない。

まもなく春樹が癌で急逝したという知らせを受けて志保子は打ち砕かれた。私のせいだ。私があの人を縮めたのだ。告別式に現れたとき、周りの視線は過酷なものだった。とりわけ親戚でもなんでもない農協や近所の人たちはあからさまに刺すような目で見た。居場所のない彼女を優しくいたわつたのは、目の不自由な春樹の母親だけだった。

高梨春樹の死から一年ほど後、結城はたまたま旭川で仕事があつたとき美奈子が預けられている保育園のそばで様子を見ていたことがある。夏の陽射しが大地をこがしていた。結城は炎熱を避けるように木陰に立つた。そこにはアイアンのベンチが置かれバツタが一匹張り付いていた。結城はバツタを指でつまんで、そつと芝生に置いた。その小さな公園からはピンクに塗られた保育園の玄関を見ることができた。その日は土曜だったせいも、十二時を過ぎたころから何人もの母親が園児を迎えにきた。しばらく待っていたが美奈子の母親の姿は見かけなかった。

結城の想いの中に春樹の葬儀のときの映像があつた。黒服を着て、視線を誰とも合わせることなくうつむいていた若い婦人の姿がありありと残っていた。見れば分かるはずだ。その後、母娘はどんな生活をしているのだろうか。少しして、保育園の玄関の横にある大きな銀杏の木陰で何人かの子供たちが一人の女の子を囲んでなにかを始めた。女の子はベソをかいている。男の子たちが女の子の頭を棒のようなもので小突いていた。

よく見ると、それはまぎれもなく高梨春樹の葬式のように見た少女だった。あるときより背が伸びているが、大きな瞳とサクランポのような赤い唇は間違いようがない。女の子は保母たちの目が届かない所でいじめられているに違いない。結城はたまりかねて公園のベンチから立ち上がり小走りで駆け寄つた。

「何をしている？　ひとりをみんなでいじめてはいかんぞ」

見たこともない大人の出現にみんなは一目散に逃げ出した。結城は女の子のそばに来て、転んだときについた砂を払ってやった。

「お嬢ちゃん大丈夫かい」

声をかけると、大きな黒い瞳でこくと首をふつてうなずいた。結城は不審者のように怪しまれてもいけないのですぐにそこを離れ再び公園のベンチで待った。まもなく、告別式のときに少女の隣にいた女性がバス停のほうから歩いてきた。白い袖なしのカットソーを着て、薄いピンクのスカートをはいている。髪を活動的なショートにきめ、唇をキツと結んでいた。

疲れきった表情をしていたが、その顔には幼子を育てながら自分の力で自立しているという凛としたものがあつた。中に入つてすぐに女の子を連れて出て来た。まぎれもなくあの母娘だ。女の子は大きくなった。結城がベンチから立ち上がり、公園の入り口から立ち去ろうとしたとき、女の子が気づいたらしく声をあげた。

「あ！　さっきのおじちゃんだ」

「どうしたの？」と母親はいった。

「ママ、あのおじちゃんがミナ子を助けてくれたんだよ」  
女の子は結城に向かって走り出してた。

「おじちゃん」

結城がためらっていると、女の子がつかつかと近づいて「はい、これあげる」といって何かを差し出した。それは小

さな貝殻だった

「おじさんにくれるの」

「うん」

女の子は元気よくうなずき、じゃあバイバイと小さな手をふった。

「バイバイ。きれいな貝殻をありがとう」

様子を見ていた母親は、事情のみみぬかない表情で娘の手を引き、お辞儀をして帰っていった。後ろから見ていても母と娘の会話が聞こえてくるようだ。女の子は母親に何かを話し、母親は驚いた表情をときおり見せている。まもなく母親はこちらをふり向いて深々と結城に向かって頭をさげた。いきさつを娘から聞いたのだろう。

結城もかすかに頭をさげた。道はまっすぐに伸びている。遠くから親子が見えなくなるまで木陰から見送っていた。すっかり姿が視界から消えたとき、手に握り締めた貝殻を太陽にかざして見た。桜貝だろうか。うすいピンク色をしているが角度を変えると虹色に輝く。おそらく子供にとっては宝物のはずだ。それを惜しげもなく自分にくれた寛大さに女の子が持つ天性の優しさを感じ取った結城だったが、それと同時に、自らの中にある、無垢とは対照的な陰湿さにたじろいでいた。

その後も、結城はなんとかして二人の助けになりたかったが、その方法が思い当たらなかつた。世間の人が理解できるようなふさわしい理由がないのだ。考えつくことといえれば、誕生日に花を贈るといふアイディアがせいぜいだったが、



それが、さして助けになるとは思えなかつた。

結城は地元の探偵社に頼んでときどき二人の様子を知らせてくれるよう依頼した。それを口うるさい妻に知られないよう、自宅ではなく仕事用に借りていた川崎にある事務所に送らせた。その報告を読むたびに、何とかして助けてあげたいと思うのだが、そんなとき別の自分が耳もとでささやきかける。白々しいことをするな。作品を盗んだ教えの子どもと母親を助けるなど偽善そのものではないか。おまえは自分の氣持をたた安らがせるためにそうしたいのだろう。

その糾弾には一言もなかつた。おそらくそのとおりなのだろうと結城は思った。石野志保子が自動車事故で亡くなったのはそれから二年ほど経つてからだつた。志保子の母親も亡くなつたが、美奈子だけが奇跡的に命をとりとめた。目立つた外傷はなかつたが視力が失われていた。治療のかいなく視力は戻らなかつた。

引き取り手のいない美奈子は旭川郊外にある施設に入れられた。結城のもとに探偵社からの報告があつたのは事故から二ヶ月ほど経つていたが、その報告が来たとき結城本人は日本にいなかつた。ドイツのハイデルベルクで行われた作家フォーラムに出席していたのだ。

一週間の集いが終わつた後、ヨーロッパの何カ国かを旅行し、日本に帰つたのはかなりあとだつた。三ヶ月ぶりに自宅に帰ると、妻の咲江が憔悴とした表情で立つていた。たゞいまといつても返事もしない。咲江のムラの多い氣質を知つてはいたが遠くから帰つて来た結城はさすがにいらつた。

「どうしたんだ？ 久しぶりに帰つたというのに」

咲江は視線を合わせようとしない。

「具合でも悪いのか？」

しばらくの沈黙が続いたあと咲江は三白眼を光らせ、少し大きめの封筒をぶつきらぼうに差し出した。

「これはいったい何ですか？」

見ると、それは探偵社に依頼しておいた石野志保子と娘の美奈子に関する知らせだつた。結城が日本にいない間に二通きていたようだ。それはいずれも川崎の事務所送到られてくるはずのものだつた。

「なんでこれがここにある。おまえが封筒を開けたのか？」

「たつて緊急な知らせでもあるのかと思ひましたから」

「なんでここにあるのかと聞いているんだ」

めつたに怒つた顔を見せない結城の鋭い視線に咲江はくさがるように小鼻を膨らませていい返した。

「あなたの事務所があるビルの管理人さんが、ポストに入りきらなくなつたので連絡をくれたのよ。こちらへ送つてもらいました。このダンボールが全部そうですよ」

結城は自らの迂闊さを悔いた。詳しく説明すれば自分の盗作のいきさつまで話さねばならなくなる。不自然に黙している夫に咲江は刑事のような口調でつめよつた。

「いったい誰なんですか、この人は？」

明らかに不審を抱いているに違いない表情だ。同封してある写真も見たに違ひなく、若くて美しい得体の知れない女に嫉妬しているのは明白だつた。夫が自分の知らない所で女を

困い、隠し子でもこしらえているのかと思つていろいろにも見える。結城が、困つたものだと思ひながら、説明できずのためらつていると、咲江がさらにまくしたてた。眉間に深い線が入つてゐる。

「黙つていちゃ分らないではありませんか。あなた今まで講演だなんだとかこつて地方に出かけていたのはこういうことだつたんですか」

「何をいう。帰つて早々よしなさい、みつともない」

「みつともないはこちらのセリフですよ。この女は誰なんです？ 子どもはまさか」

そばに刃物があれば刺されそうな勢いだ。ここまであからさまに追及されると弁明せざるをえない。結城は口中の唾をのみ込んでから、つとめてゆつくりと言葉を出した。

「それはいくらなんでも誤解というものだよ。急に怒つていわれるとすくんでしまうじゃないか。この人は三年ほど前に亡くなつた教え子の奥さんとその娘だ。まあ正確にいうと元奥さんだが」

「そんなこと信じられませんよ」

「おまえにも以前話しただろう。弘前から仕事で帰るとき、末期癌で亡くなつた教え子の葬儀に出るために北海道に行ったのを。高梨君という青年だよ。また三十代の若さだつた」

「どうしてあなたがその人の遺族の様子を探偵に頼んで調べることがあるんですか」

「高梨君から亡くなる前に頼まれたのだよ。自分はもう幾らも生きられないが娘が不憫だ。勝手なお願いだ、どうか見

守つてやつてほしい。そういうわれたのだ」

つじつまを合わせるようにとつきに出た嘘だつた。しかし結城の思いの中では嘘とは感じてはいなかつた。最後の見舞いとき、原稿を自分にたくした高梨青年が呼び止めて何かを伝えようとためらつていた。確かにあのときはつきりと言葉にしなかつたが、別れた妻や娘のことを伝えようとしたに違いない気がする。

夫の説明を聞くにつれ咲江の眉間の皺はいくらか薄らいでいった。でもまた半信半疑には違ひなかつた。トーンダウソした声で、そうなのですかといつた。

「そうさ、だから数ヶ月にいちどずつ様子を知らせてもらつてゐる。何かあつたら助けてやらねばならんからな。もう一通のほうも見たのか？」

「いいえ、それはまだです。来てからもうひと月近くにもありませんよ」

咲江は未開封の茶封筒を差し出した。結城は二通の報告書を並べ、新しいほうの封を開けた。その報告は結城を驚愕させるものだつた。

「大変だ。この人が亡くなつた。女の子の母親のほうだ」

「ええ？」

「自動車事故だそうだ。気の毒になあ、あんなに若いのに」

続きを読むと、母親と祖母は亡くなつたが女の子は意識が戻らず集中治療室にいと書かれていた。どうなつたか気がかりだつた。結城はすぐ旭川の探偵社に電話を入れた。次の報告までかなりの間があるが待ちきれなかつた。すぐに子ども

もの様子を電話で知らせるように依頼した。

結城は幼い女の子のことを思った。わずかのうちに父親と母親を失い、自らも死の淵を歩いているという。なんという薄幸だろうか。結城は胸が張り裂けそうだった。何をさておいても事態の推移を見守りたかった。数時間後に探偵社から電話が入った。

「お護ちゃんは意識が戻りましたが、残念ながら目が見えないそうです。外傷はあまりないのですが視神経に損傷をおったようです」

「それでどうした？ その後は」

「病院を出されて旭川の郊外にあるリラの家という施設に入られました」

「引き取り手がいないのか？」

「ええ、身寄りがありません。一緒に亡くなった祖母のお姉さんという人がいるのですが高齢で引き取れないということとで」

「視力はまったく戻らんのか？」

「そのようです」

「こんなに早く退院させたというのか。もつと治療したらなんとかなるんじゃないのか？」

結城は探偵社の社員を知らずに怒鳴りつけていたが、担当者には穏やかに答えた。

「病院のほうは現状では無理という結論を出したようです。治療費のこともあるのかもしれませんが」

「何だと、そうならけしからんじゃないか」

「あくまでも私どもの推測にすぎませんが」

「その病院のことも調べろ。そのリラの家についても分かることは何でも知らせてくれ。これからはひんぱんに報告をよこすようにしてくれないか。金は余分に払うから」

結城は、もはや何に突き動かされているのか自分でも分からなかった。レールを踏み外したもう一人の自分を何とかして元に戻そうともがいているかのようにもあつた。その、悪あがきといえなくもないものが、彼をして幼い少女の安否のために奔走させた。その少女を救うことが結城慎一郎の当面の目標となつた。

幾つもの重要な約束をキャンセルして結城は旭川へ飛んだ。執筆の仕事からは火が消えたように遠ざかつた。新聞には断筆したのではないかと書かれた。咲江は夫が何かに気狂いしているのしか思えなかつた。なぜ幼い少女のためにそこまで夢中になるのかと結城を責めた。子どもができない自分への当てつけなのかとヒステリーを起こすしまつた。

咲江はやがて実家と軽井沢の別荘に行つたきり帰つてこなくなつた。六郷の自宅は真夏の炎熱にさらされた。誰にも世話されなくなつた池の高価なランチュウはすべてが死に絶え、庭の花も木も瞬く間に枯れていった。結城が咲江と正式に離婚したのはそれからまもなくのことだつた。咲江からは多額の財産分与を迫られた。結城は自宅を売り払つて現金と別荘を彼女に与えた。

（七章に続く）